

## 漢文を学ぶために

漢文とは、中国の文語文および文語文法に基づき、漢字を用いて書かれた文章をさします。日本を含む東アジア諸国は、漢文を共通語として使用し、互いの交流を進めて文化を発展させてきました。

我が国の文化に漢文が与えた影響の大きさはかりしれません。固有の文字を持たなかった日本は、漢字・漢文の導入によって書きことばを手に入れ、言語・文学・思想を形成・発展させてきました。漢文と総称される詩文の多くが中国の古典であるにもかかわらず、日本語・日本文化の柱を形成する古典として今も学ばれ続ける理由は、ここにあります。

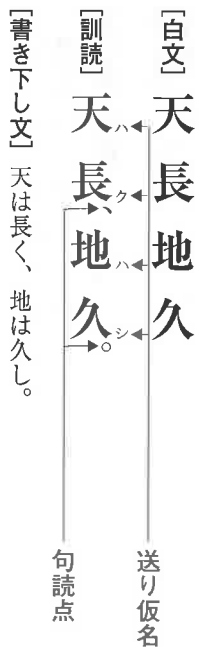
この漢文を日本語として深く理解するために、私たちの祖先は訓読という方法を創り出しました。高等学校での漢文の学習を始めるにあたり、まずは「訓読のきまり」を確認し、漢文読解の基礎を固めてから、漢字文化が築きあげてきた豊かな言語世界に分け入って行くことにします。

### 漢文入門

## 訓読のきまり

中国の文語文法と日本語のそれとは、文の構造が違います。しかし、漢字を取り込んで発達した日本語には、単語レベルでは古典中国語と共通する点が多く存在します。そこで日本人は漢字だけで書かれている原文に、句読点・送り仮名・返り点などを加えて日本語として訳読できるようにしました。これを訓読といい、句読点・送り仮名・返り点を訓点といいます。訓点が付いていない原文は白文といい、訓点に従って漢字仮名交じり文に書き改めたものを、書き下し文といいます。

### 1 句読点と送り仮名



#### 「訓点」

- ▼ 句読点 「句点」。「読点」。「文や内容の区切りを示すために付ける。」
- ▼ 送り仮名 古典文法に従って漢字の右横下に歴史的仮名遣いを用いてカタカナで付け、訓読する際に必要となる助詞や活用語尾、または副詞の一部などを補う（三六二ページ参照）。
- ▼ 返り点 「レ」「一」「ニ」「上」「下」などの記号を漢字の左下に付ける。

#### 「現代語訳」

天には永遠の生命があり、大地には悠久の生命がある。

2 返り点

返り点は、日本語として読むときに語順を変える必要がある場合に用います。  
「返り点の種類」 主な返り点には、次のような種類があります。

① 「レ点」 連続する二字について、前後の順番を入れ替えて読む符号。

② 「転点」 禍ひを転じて福と為す。

③ 「歳月不待人」 歳月は人を待たず。

④ 「一二点」 離れた位置にある二字について、下から返って読む符号。

⑤ 「人生感意气」 人生意気に感ず。

⑥ 「懸羊頭売狗肉」 羊頭を懸けて狗肉を売る。

⑦ 「上・下点」 上・中・下 一・二点が付いた部分を挟んで、下から返って読む符号。

⑧ 「悪称人之恶者」 人の悪を称する者を悪む。

⑨ 「下以私事害公義」 私事を以つて公義を害せず。

「返り点使用の実際例」 右に紹介した返り点は、単独で用いられることは少なく、次のように複合的に使用される場合がほとんどです。

① 「レ点」と「一二点」が併用される場合。

② 「レ点」と「一二点」の「二」を同時に用いる（「レ」を同時に用いる）場合。

③ 「レ点」と「一二点」が併用される場合。

④ 「レ点」と「上・下点」の「上」を同時に用いる（「レ」と記す）場合。

⑤ 二字以上の熟語に返って読む場合。二字を結ぶ記号「一」が付けられ、返り点は、その左側に付けられる。

吾日三省吾身。

吾日に吾が身を三省す。

① 「書き下し文」表記の原則  
漢字仮名交じり文で表記する。

② 送り仮名は文語文法に従い、歴史的仮名遣い（平仮名）で表記する。

③ 日本語の助詞や助動詞にあたる漢字（三五ページ）は、平仮名で表記する。

④ 置き字（三五七ページ）は表記しない。

⑤ 再読文字（三五九ページ）は、最初は送り仮名を付けてそのまま漢字で表記し、二度目は、平仮名で表記する。

⑥ 引用や会話文の終わりに「と」を送る。

⑦ 例 恵王曰「善。」と。

⑧ 例 未だ来らず。

「日本語の助詞・助動詞にあたる漢字」

- 〈助詞〉
か・や（疑問・反語）……乎・邪
耶・也・哉・与・夫・歟・矣
かな・か・や（詠嘆）……哉・矣・乎・夫・也・与・歟・邪・耶
のみ（限定）……耳・已・爾・而已・而已矣
の（主格・連体修飾格・同格）……之
より（起點）……自・從・由
と（並列）……与
は（主格）……者
〈助動詞〉
ず（打消）……不・弗
たり（断定）……為
なり（断定）……也
なり（可能・許可）……可
べし（可能・許可）……可
ことし（比況）……若・如
しむ（使役）……使・教・令・遣
る・らる（受身）……見・被

原則一 「送り仮名の付け方」(内閣告示)に準じ、誤読のおそれのないように配慮し、読みやすくする。

原則二 活用のある語は、活用語尾を送る。

原則三 付属語である助詞・助動詞を送る。

原則四 誤読の可能性があるときは、判別のために読み仮名の最後の一音を送る。

**名詞**

①名詞には、送り仮名を付けない。 例人・花・隣・右

\*誤読のおそれのあるものは、最後の一字を送る。

例半バ・幸ヒ・斜メ

②動詞から転じた名詞は、動詞の送り仮名による。

例動キ・戦ヒ・使ヒ・怒リ・侮リ

\*慣用的表記で、誤読のおそれがないものは送らない。

例志・恥・光・舞

③動詞や形容詞が語尾に「ク」「ラク」「ミ」「サ」を伴って名詞化する場合は、動詞・形容詞の活用語尾から送る。

例日ハク・謂ヘラク・以ヘラク・樂シミ・大キサ

**代名詞**

る。 例再ビス・以ツテス・於イテス

⑤二つ以上の訓読みがある場合、漢字部分は同じ読みを受け持つようにする。形容詞・形容動詞の場合もこれに準ずる。

例動ク―動カス 及ブ―及ボス 聞ク―聞コユ

**形容詞**

①形容詞は、活用語尾を送る。 例善シ・宜シ・勿カレ

②動詞・副詞から転じた形容詞は、もとの品詞の送り仮名による。 例疑ハシ・輝カシ・未ダシ・甚ダシ

**形容動詞**

①形容動詞は、活用語尾を送る。 例急ナリ・寂タリ

\*誤読のおそれのあるものは、語幹の一音もしくは二音を加えて送る。 例新タナリ・静カナリ・平ラカナリ

②副詞から転じた形容動詞は、副詞の送り仮名による。

例専ラナリ

**副詞**

①副詞は、最後の一音を送る。

例能ク・豈ニ・唯ダ・猶ホ・此ク・若シ・与ニ・復タ

\*誤読のおそれのあるものは、さらに一音を加えて送る。ただし「又・亦・相・皆」は、慣用により送らない。

①代名詞には、送り仮名を付けない。

例我・吾・己・汝・爾・孰・誰・何

\*誤読のおそれのあるものは、最後の一字を送る。

例何レ・孰レ・何ク・安ク

②代名詞が、助詞「ガ」「カ」「ノ」「ヲ」「ニ」を伴う場合は、その助詞を送る。

例我が・吾ガ・之ガ・誰カ・此ノ・其ノ・我ヲ・之ニ

③指示代名詞が助詞を伴わないで読まれる場合は、最後の一音を送る。感動詞の場合もこれに準ずる。

例此レ・之レ・維レ・其レ・夫レ

**動詞**

①動詞は、活用語尾を送る。

例読ム・書ク・学ブ・習フ・恥ツ・怒ル・光ル

②名詞から転じた動詞は、名詞以外の部分を送る。

例雨フル・傷ツク・指サス・横タハル・鞭ウツ

③形容詞から転じた動詞は、形容詞の送り仮名による。

例楽シム・悲シム・親シム・苦シム・怪シム

④副詞や連語が動詞化したものは、もとの品詞の送り仮名による。

例大イニ・徒ラニ・幸ヒニ・故ラニ・況ンヤ

②副詞に助動詞などが付いて新たな副詞が作られる場合は、もとの副詞の送り仮名による。

例必ズシモ・聊カモ・尽クハ

③活用語を含む副詞は、活用語の送り仮名による。

例譬ヘバ・宜シク・敢ヘテ・苟シクモ・須ラク

④名詞・代名詞を含む副詞は、名詞・代名詞以外の部分を送る。

例何ゾ・為ニ

\*誤読のおそれのあるものは、さらに一音加えて送る。

例安クンゾ・安クニカ・何クニカ・焉クニカ

⑤重音の副詞(接続詞)には、「々(踊り字)」を添える。

例各々・愈々・偶々・交々・屢々・数々・看々・抑々(接続詞)

①接続詞は、最後の一音を送る。 例即チ・乃チ・便チ

\*ただし「又・亦」は、慣用により送らない。

②活用語を含む接続詞は、活用語の送り仮名による。

例然ラバ・然レドモ・而ルニ・以ツテ・及び

③他の品詞を一部含む接続詞は、もとの品詞の送り仮名による。

例故ニ・然モ・而シテ・或ルイハ・何トナレバ

【演習二】 次の漢文に、返り点を参考にして読む順に番号を付けなさい。

1. 覆水不返盆。
2. 尽人事、待天命。
3. 平定海内。
4. 有言者、不必有德。
5. 一編一詠、膾炙人口。
6. 欲東渡、烏江。
7. 無不知愛其親者。
8. 不下為兒孫買美田。

【演習二】 次の白文に、書き下し文を参考にして返り点・送り仮名・句読点を付けなさい。

1. 李下不正冠。  
李下に冠を正さず。
2. 不入虎穴、不得虎子。  
虎穴に入らずんば、虎子を得ず。
3. 欲以螾螂之斧、禦隆車之隧。  
螾螂の斧を以つて、隆車の隧を禦がんと欲す。
4. 客有能為狗盜者。  
客に能く狗盜を為す者有り。

【演習三】 次の漢文を書き下し文にしなさい。

1. 桃李不言、下自成蹊。
2. 窺入其意、形容之、謂之奪胎法。
3. 不下一惡忘衆善。
4. 不以下一惡忘衆善。
5. 敗軍之將、不可言勇。
6. 遇不遇者、時也。